

## 保育内容領域「言葉」を意識した表現授業における可能性の一考察 ～音楽表現から紐解く「言葉」の学び～

### A Prominence in “Language” for Expression Curriculum ～ Understanding the Content of Language Though Music Expression ～

森 広 樹  
MORI Hiroki

キーワード：5 領域、言葉、表現、リズム、替え歌

Keywords: 5 Perspectives in Understanding Growth of Children, Language, Expression, Rhythm, Song Parody

#### 概要

新たな教職課程の設置のもと、「教科に関する科目」は「領域に関する専門的事項」へと変更された。これに伴い保育者養成では、各領域の専門的な視点を通して、保育における領域の考え方をより深めることを目的としたカリキュラム構成が検討されている。本論では、領域「表現」の専門的視点のもと、「言葉」を用いた子どもの表現活動に注目し、「表現」、「言葉」両領域の特性を踏まえた表現授業における新たな展開の可能性を考える。研究方法として、まず領域「表現」と「言葉」の相互関係を明らかにする。その上で、筆者が作成した教材をもとに、音楽的表現の中に豊かに用いられる言葉の実態について検証し、実践的に両領域の専門性を学ぶことのできる授業展開について考察する。

#### I. はじめに

平成 28 年、教育職員免許法の一部改正が行われ、新たな教職課程の設置のもと、これまでであった「教科に関する科目」は「領域に関する専門的事項」へと変更されている。これに伴い保育教諭養成課程研究会が発表した「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～」では、「領域に関する専門的事項」の考え方を次のように述べている。「領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする。幼稚園教育において、「何をどのように指導するか」という視点で見たときの「何を」を深める部分である。幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる。<sup>1)</sup>（下線は筆者。）以上のことからわかるように、これまでの「教科」という概念は撤廃され、それぞれの領域の視点から、より保育に特化した専門性のもと、これまで以上に保育者を目指す上でマルチな学びが深められるようなカリキュラム構成が養成校に求められている。本改正は、領域「表

現」の教員においても大変重要な事項であり、「音楽」、「図画工作」、「体育」といった科目の垣根を超えた、乳幼児の生活と子どもの表現活動を基盤とした保育ならではの授業展開について、今一度見直す良い機会であると考え。また保育の学びは、5領域それぞれの視点は大切にしつつも、時としてその区分を越えることにより、深い子ども理解へと繋がることがある。平成30年度改訂の幼稚園教育要領および保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にて、感性と表現に関する領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」<sup>2)</sup>とあるのに対し、言葉の獲得に関する領域「言葉」では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」<sup>3)</sup>と記されている。即ち、保育者を目指す学生が「表現」、「言葉」の両領域の指導法を学ぶにあたり、子どもが自分なりに表現する姿を見とる力、また子どもが表現しようとしているその姿に気付き、その子どもに寄り添う想いを育むことが重要視されているのである。本論では、子ども理解の理念に基づき、保育士養成校における表現系授業の多様な可能性を見出すべく、保育内容領域「言葉」を意識した音楽表現の学びについて考察していく。

本研究では、授業内で学生が作成した作品（歌詞）を分析の対象としている。学生に対しては、文章データは個人情報特定されない形で扱うこと、研究目的以外では使用しないことを書面および口頭で説明し、研究協力への同意を得ている。

## II. 保育内容領域「言葉」と「表現」

### 1) 6領域から5領域へ

昭和31年、「保育要領」を改訂した教育要領で、「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「絵画制作」そして「音楽リズム」の6領域のもと構成されていた保育内容は、平成元年の幼稚園教育要領、及び、平成2年の保育所保育指針の改訂により、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、そして「表現」の5領域へと変更され、現在も保育内容の区分として用いられている。本論で注目すべき改訂点は、「言語」が「言葉」に、及び「絵画制作」と「音楽リズム」が統合され「表現」へと変更されたことである。鈴木は、領域「言語」が「言葉」に変更されたことについて「これまでの言語を正しく身に付けるための指導から、子どもが自分の感じたこと、考えたことなどを友達や保育者などに自分の言葉を使って表現したり、伝える意欲、さらには、相手の話を興味・関心を持って聞く態度など、園生活を通して、様々な言葉に出会い感覚を豊かにすることに重点が置かれたためである。」<sup>4)</sup>と述べている。また改正後の「表現」は、音楽的、造形的、さらには身体的な要素を含む、子どもの発達の視点から捉えなおされた「感性と表現に関する領域」として確立された。そもそも子どもが生活、遊びをする過程で生まれる表現性を、教科のような区分の視点から理解することは好ましくない。例えば、クレヨンで絵を描くことを覚え始めた子どもは、自分が見たり経験したものを描こうとするだけでなく、クレヨンを握った手が紙の上を走る身体的な感覚そのもの自体を面白がったり、自分の内なるリズムに乗って線や円を描く行為そのものを楽しむことがある。また音に興味を示し始めた幼児に対し、マラカスなどの手作り楽器の制作を行うとき、異なった容器、大豆やヒヨコ豆、ビーズやストローを短くカットしたものなどのバラエティーに富

んだ教材を用意しておくだけで、ただ制作するという行為だけでなく、素材のバリエーションを楽しんだり、それぞれが心の赴くまま自由に動くなどして微細な音の変化を発見し、それを面白がる姿に出会うことがある。そういった子どもの幅広い表しから子ども理解を深めていくといった視点を持つ領域「表現」の確立は、保育学史上においても大変改革的であったと考えられる。

## 2) 他者と分かち合うことから学ぶ

次に平成29年幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂において領域「言葉」の変更事項として注目すべき点として、鈴木らは、「「伝え合う」力を育むことに重点が置かれていることである」<sup>5)</sup>と述べる。実際に領域「言葉」のねらい(2)では、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」<sup>6)</sup>との記載が追加されている。これは領域「言葉」の専門性の中で、保育士や子ども同士など、他者との関わりを通して伝え合う楽しさを体験することの重要性を説いているのである。また領域「表現」では以前から記されていた内容(3)「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。」<sup>7)</sup>に加え、平成29年度の改訂においては、内容の取り扱い(3)にて「生活や経験の発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。」<sup>8)</sup>と、下線部分で記した追加事項が示されている。近年、本校の保育内容研究「表現」の授業展開においてもこのことに重きを置き、それぞれが喜んで各々の表現をすることに加え、他者が表現することに興味関心を抱き、それを見とる行為そのものを楽しむための工夫に力を注いでいる。

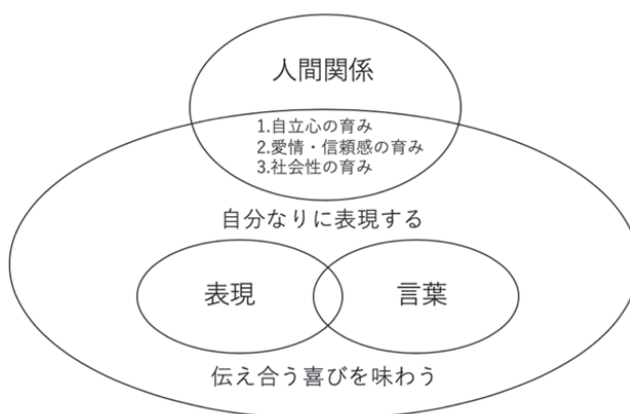


図1 『領域「表現」と「言葉」を繋ぐ「人間関係』』

Figure 1 The Bridge of Expression and Word

## 3) 領域「表現」と「言葉」を繋ぐ「人間関係」

1)、2)を通して、これまで領域「表現」と「言葉」が保育学の歴史上、子ども理解を深める学びの充実を目的にどう発展してきたかを考察した。ここではその過程を通して両領域

の専門性における相互関係について考えていきたい。両領域の専門性から代表的な共通項として「自分なりに表現する」、そして「伝え合う喜びを味わう」の2点が挙げられると考える。図1『領域「表現」と「言葉」を繋ぐ「人間関係』は他領域を総合的に捉えた一例である。子どもの多様な表現性を見とる上では、一つの領域の専門性に固執するのではなく、例えば環境から影響を受けた子どもが身体で想いを表現する様子、言葉に音やリズムを即興的に付けて表している様子など、領域の専門性を踏まえながらも子どもの表しを全体的に捉える力も、保育士としての眼差しを育む上で重要であろう。言葉や音、リズムを使って自分なりに表現しようとする力は、主体性や自立心を育み、また心を動かす出来事や、自身の思いを保育者や友達に伝えようとする喜び、時には友達の表現から色々な感性に触れる体験を楽しむことを通して、周りの人たちに対し愛情や信頼感を育む。そして園という環境の中で、共に日々生活することを通して、子どものうちに自然と社会性が育まれることは、保育において大切な学びの一つである。このことは図1に示したように、「表現」や「言葉」の領域を通して自分なりに表現したり、互いに伝え合う喜びを味わうことは大きな視野で見ると領域「人間関係」とも連携していることを示している。保育士を目指す者は、多様な表現をする子どもたちの思いに寄り添うためにも、これら領域の専門性を学びながら、子どもの表しを理解したいという想いを育むことが重要である。また養成校における領域「表現」の教員としては、表現の専門性に重点を置きつつ、合わせて他領域との繋がりを表現活動の中で示していくことも、学生がそれぞれの内に保育観を構築する助力として、重要であると考えられる。

### III. 音楽表現と言葉

領域「言葉」の「内容の取り扱い」(4)では、「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」<sup>9)</sup>と示されている。ここでは自分なりに表現すること、伝え合う喜びを味わうことを踏まえ、2つの歌曲を用いながら、言葉の響きやリズムの表現について、更には楽曲に対し自由に歌詞を付ける言葉遊びを通し、子どもが言葉に親しみをもち豊かな表現の経験をするを目的とした活動の展開について考察する。

#### 1) たくさんの「～したい」を表現する

譜例1「なんて素敵だろう」は、2019年5月11日に行われた三島市公私立保育園保育会主催「第56回つくし会総会」での講演(加藤明代氏と共同講演)のために、加藤明代氏に委託され筆者が作曲した歌曲である。本楽曲の制作にあたり、まず初めに加藤氏から楽曲に対する希望についての聞き取り調査を行い、4つの「～したい」という言葉が組み込まれた歌詞のアイデアを伺った。そこから、本楽曲のコンセプトとして、『たくさんの「～したい」という想いが詰まったうた』という案が生まれた。本楽曲の簡単な構成は次の通りである。1.Aメロ [1～8小節] ではたくさんの「～したい」から成る旋律で構成され、A' [1～9小節] では、メロディーが繰り返される中、また新たな「～したい」が加わり、やがてサビへとつながっていくという、とてもシンプルな構成であり、1番を歌い切るまでに8つの「～したい」という想いが描かれるのである。

譜例1「なんて素敵だろう」  
Sample 1 “How wonderful”

なんて素敵だろう

D A Em A7 D A7/E D/F#

はしりたい つくりたい おどりたい うたいたい  
はずみだいかなでたい えがきたい とどけたい

5 G F#m 1. Em7 A7

やりたいおもいが あふれだす はじめよう

9 2. Em7 A7 D D7 G F#m

すきあはじめよう 1.おもしろい ひろがつてきこと  
2.おもしろい つながつてひと

13 Em7 A7 D G Em7 F#m B7

え てくる よ はずんだ こえが なん  
つ になる よ こころと こ

17 Em7 A7 Coda D D7 G

てすてきだ ろう D.C. ろう おもしろいが

21 F#m Em7 A7 D G Em7 F#m B7

ひろがつてきこえ てくる よ はずんだ こえが

26 Em7 A7 D

なんてすてきだ ろう

Copyright © Hiroki Mori/Akiyo Kato

譜例2 4つのフレーズ  
Sample 2 Four Phrases

Figure a Figure a' Figure b Figure c

I V7 ii V7 I V<sub>5</sub><sup>6</sup> I

表 1 4つのフレーズ  
Table 1 Four Phrases

	figure a	figure a'	figure b	figure c
旋律線	上行	上行	上行	上行(隣接音を含む)
和音	I	Vの属七	ii⇒Vの属七	I⇒V属七第一転回⇒I第一転回
リズム	♪♪♪	♪♪♪	♪♪♪	♪♪♪♪(ピックアップ)

譜例 2、及び図 2 は楽曲冒頭に現れる 4 つのフレーズの詳細である。これを 2 回繰り返すことにより計 8 つの「～したい」という言葉が旋律に乗せられるのである。ここではその音楽的な要素により示される 4 つのフレーズの精神的効果について解説する。

まず初めに、Figure a から Figure c に共通している点は、「～したい」という前向きな想いを描くべく、すべて上行する旋律線を採用している。次にそれぞれのリズムについて考えていく。Figure a と Figure b は全く同じリズムを繰り返すことにより、曲冒頭で作品の雰囲気をつまみやすいよう配慮している。またシンコペーションのリズムを採用することにより、言葉の持つ前向きなイメージと同様、音楽的にもフレーズに前向きな動きを持たせている。Figure b はシンプルな八分音符と四分音符から成っており、Figure a、a' と比べ落ち着いた雰囲気のリズムで描いている。Figure c のリズムにおける特徴としては、Figure a、a' b は全て強拍から始まるのに対し、弱拍（アウトタクト、またはピックアップ）から始めるということである。また和声的観点から見ると、Figure a、a' はそれぞれ一つだけの和音から成り立っているのに対し、Figure b は 2 つの和音から、また Figure c は 3 つの和音から構成される。

これらの音楽的な要素により、フレーズごとに少しずつ異なった精神効果が生まれており、自然と様々な「～したい」という言葉を自由に添えたいよう試みている。それぞれが様々な「～したい」という言葉を想像し、その想いに乗せて替え歌として歌唱することにより、言葉の響きやリズムを、音楽を通して楽しんで表現することを目的とした楽曲なのである。問題点としては、その旋律、リズム、また和声的進行が西洋音楽の規則性に従って描かれているが故に、言葉を音に合わせる際、ある種柔軟性に欠けることが考えられる。

## 2) 思い思いに変化する音節やリズム

譜例 3 は、2019 年前期「保育内容研究 V (表現 A)」授業の教材の一環として、著書が制作した音頭である。「かっぱ」というキーワードをもとに、学生たちが想像したことや、楽しいと思ったことなど、様々な表現活動を行い、最終的には「かっぱのお祭り」を開催した。本楽曲は「かっぱのお祭り」での盆踊りのために制作したこともあり、わらべ歌や民俗音楽などではお馴染みの 5 音階（陰旋法）のみを用いて作曲している。それに加え、今回は本楽曲に学生が替え歌を作ることを前提に制作したということもあり、楽曲としては 5 つのフレーズのみを採用し、5 音階とフレーズのみ重点を置くことにより、旋律におけるリズムの扱いは大変即興的なものとなっている。

譜例3 「河童の音頭」  
Sample 3 “Song of KAPPA”

河童の音頭

MMM

ちよーいと おーでまし かーつばさーん  
5 おもい こーらを よーこいしよ  
9 つるんと うーるおう おさらにーは  
13 こんやも きれいーな おーつきさま  
17 せいこんこめて うたいおどれやソーラソーラヨイサツサ

ちよいとおでまし かつばさん  
重い甲羅を よつこいしよ  
つるんと潤うお皿には 今夜も綺麗なお月さま  
せいこんこめて 唄い踊れやソーラソーラヨイサツサ

今回の替え歌制作の授業は次の段階を追って行った。1. まず初めに歌唱活動を通して、普段歌い慣れていない楽曲（譜例1「なんて素敵だろう」を含む）を歌うこと、またそこに表される歌詞に親しむ。2. 教員が「河童の音頭」を何度か歌唱し、それに合わせて学生は自由に手拍子を行う。3. 学生は教員に合わせて一節ずつ歌い曲を覚える。この際、敢えて楽譜は見ずに、歌詞カードのみを見ながら感覚的に歌を覚える。4. グループに分かれ、どんなシーンを描きたいか話し合い、鼻歌を用いて即興的にメロディーに歌詞を付けていく。5. 制作した替え歌を皆で歌い合い、他のグループが制作した替え歌を面白がったり、興味関心を持つ。ここでは、グループワークで学生が制作した、ストーリー性溢れる「河童の音頭」の替え歌を分析し、歌詞により自由に変化する曲の音節、リズムや旋律について考察していく。分析は以下の方法で行う。

1. 歌詞を抜き出し、オリジナルと音節の数を比較する。
2. 敢えて楽譜化することで、替え歌によって変化する旋律やリズムを可視化する。

表 2 学生による替え歌の歌詞

Table 2 The Parody Written by Students

オリジナル

ちよいと 3	おでまし 4	かっぱさん 5	12 音節
おもい 3	こうらを 4	よっこいしょ 5	12 音節
つるんと 4	うるおう 4	おさらには 5	13 音節
こんやも 4	きれいな 4	おつきさま 5	13 音節

替え歌 1

おさらには 4	しょうゆを 4	たらしまして 6	14 音節
ねたに 3	びとびと 4	つけます 4	11 音節
つるんと 4	たべたら 4	おさらには 5	13 音節
こんやも 4	たべたい 4	かっぱずし 5	13 音節

替え歌 2

かわから 4	ひょっこり 4	かっぱさん 5	13 音節
きょうも 3	ひとに 3	わるさする 5	11 音節
はたけから 5	きゅうりを 4	ぬすんできては 7	16 音節
こんやも 4	やぐらで 4	さわぎだす 5	13 音節

替え歌 3

みどりの 4	かっぱさんが 6	おりました 5	15 音節
あっちの 4	かわにも 4	おりました 5	13 音節
みぎも 3	ひだりも 4	かっぱだらけ 6	13 音節
こよいも 4	ゆかいな 4	かっぱまつり 6	14 音節

表 2 は、学生がグループで制作した替え歌の一部であり、オリジナルと異なる音節部分をグレーでハイライトしたものである。本作の歌詞の構成は、大きく分けて 5 フレーズあるが、今回は最後のフレーズはそのままにして、初めの 4 フレーズを使った替え歌を行なっている。(表 2 では 4 つの段落に分けて記載している部分である。) また 1 つのフレーズは、短い言葉を使った 3 つのグループに分かれている。(例：1：ちよいと 2：おでまし 3：かっぱさん) 替え歌 1～3 とオリジナルの音節を比較すると、替え歌 1 は 3 グループ分、替え歌 2 は 4 グループ分、そして替え歌 3 は 6 グループ分の音節に変化があることが確認できる。それにより必然的にそれぞれのフレーズで使用される音節の合計数にも変化が生じている。



譜例 4 オリジナルと替え歌 2 の比較  
Sample 4 Comparing Original Song to Parody

オリジナル

ちよーいと おーでまし かーつばさーん  
おもい こーらを よーーこいーしよ  
つるんと うーるおーろ おさーらにーは

替え歌 2

a) かわから ひよっこり かーつばさーん  
b) きよーうも c) ひとり わるさすーる  
d) はたけから e) きゅうりを f) ぬすんできてーは

次に、譜例 4「オリジナルと替え歌 2 の比較」を用いて、学生が制作した替え歌によって変化する旋律やリズムについて分析していく。(譜例 4・替え歌 2 は学生が歌唱したものを筆者がその場で聴音して楽譜化したものである。) 譜例 4 で示した a) ~ f) は、歌詞を自由に変えたことによって生じた変化を示している。a), c), d), そして f) は、音節がオリジナルと異なることによって生じる旋律とリズムの変化である。a) は、オリジナルの 3 音節から 4 音節となっており、2 拍目から始まる付点のリズムが特徴的である。c) は、オリジナルの 4 音節から 3 音節へと変更され、全てがシンプルに四分音符で成っていること、また E の音から始まっていることで、1 音節減った部分が調整されていると思われる。d) は、1 拍目の裏拍から始まることにより、オリジナルから 1 音節増えた分の調整が成されていることが読み取れる。f) は、オリジナルの 5 音節から 7 音節と、2 音節増えたことにより、オリジナルでは 2 拍目から描かれていたフレーズは、1 拍目から付点のリズムを用いて歌唱されている点の特徴的である。

これら a), c), d), f) の音節による旋律・リズムの変更とは異なり、b), e) は音節自

体の変更がないものの、学生が歌唱した際にオリジナルとは異なっていった箇所である。b) は、オリジナルでは 2 拍目から始まるのに対し、一拍目の裏拍から歌唱されていた。また e) は、オリジナルでは 2 拍目の頭はタイになっているのに対し、2 拍目はシンプルに四分音符で歌唱されていた。これら b), e) の変化は、学生が即興的な歌唱活動に成功していたことを示している。自分たちが作った歌詞に添い、その場その場でしゃべるように歌っていることから変更が生じた部分であり、2 回目、3 回目と歌う時にはまた異なったリズムや旋律で歌唱する可能性が高い。それぞれが思い思いに言葉を発し、フレーズの流れを感じることを通して、自分たちが想像したストーリーを言葉にして表現しているのである。

#### IV. まとめ

本論では、Ⅱ. 保育内容領域「言葉」と「表現」にて、両領域の相互関係を探りながら、「自分なりに表現する」、また「伝え合う喜びを味わう」といった共通項を考察した。またⅢ. 音楽表現と言葉では、「～したい」という想いを、言葉と音双方で表現する活動、また替え歌などの言葉遊びを使って、それぞれが思い思いの表現をし合う事例を通して、領域「言葉」を意識した表現系授業の可能性について述べた。

子どもは、自分の経験したことや思ったことを表現する時、言葉を音、リズムに乗せて発することがある。例えば、お昼時に「おな～かすいた　ぐーぐーぐー」や「あっちだよ　こっちだよ」など、日常生活の中で行動する様を当然のように口ずさみながら表す姿なども、子どもにとっては一つの遊びであり、生活そのものになることがある。保育者養成校における領域「表現」の教員としては、領域の専門性のもと、まず学生自身が多様な表現活動を通してたくさんの事柄に触れ、様々な想いを抱く経験をしていくことが大切であると考えている。自身の経験の蓄積からこそ、子どもの繊細な表現活動に気付き、子ども理解を深めていくことができる。子どもの様々な表しに気付く保育者育成のためにも、「表現」の専門性と他領域との繋がりを今後も考察し、新たな表現系授業の展開に役立てていきたい。

#### 引用文献

- 1) 保育教諭養成課程研究会 (2017) 「幼稚園教諭養成課程をどうするか～モデルカリキュラムに基づく提案～」萌文書林 初版第 1 刷 1 章 教職課程認定基準の改正の概要 p.12
- 2) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針 第 2 章保育内容より p.267
- 3) 前掲書 2) p.249
- 4) 成田朋子ほか (2018) 「新・保育実践を支える 言葉」福村出版 初版第 1 刷 1 章 p.16
- 5) 前掲書 4) p.18
- 6) 前掲書 2) p.248
- 7) 玄田初榮 (1999) 「保育内容 表現」第 2 版 建帛社 p.128
- 8) 前掲書 2) p.280
- 9) 前掲書 2) p.263